悪役令嬢のお役目は、今日でお終いです。
前世大魔法使いな私には、塔暮らしはむしろご褒美ですよ？



アルス・フォン・フェデラル

フェデラル王国の第二王子で、
シェリーの元婚約者。
学園のパーティーでシェリーに婚約破棄と
北の塔への追放を言い渡す。



マーガレット・ルフラン

ルフラン男爵家の令嬢。
光属性魔法を
使うことができるため、
聖女候補とされている。



レスリー・ハリントン

アルスの護衛騎士。
魔法が使えるということに
胡坐をかいて、
訓練をサボっている。



アーデルヘルム・クリステン

クリステン辺境伯家の
当主で、
シェリーの父。
蒼い炎を操る魔法騎士。



エデル・クリステン

クリステン辺境伯家の後継で、
シェリーの兄。
妹である
シェリーに甘い。



ウィルバード

クリステン辺境伯領の
騎士。
その正体には、
秘密があるようで――？



シェリー・クリステン

クリステン辺境伯家の令嬢。
甚大な魔力を持つが故に、
第二王子の婚約者として王家に
囲い込まれていた。
とある出来事をきっかけに
大魔法使いだった
前世を思い出す。

ネロ

シェリーの塔暮らしの相棒。
ある日突然
「魔法使いサラの使い魔」
と言って、
塔にやってきた。

Characters

目次

悪役令嬢のお役目は、今日でお終いです。　7
前世大魔法使いな私には、
塔暮らしはむしろご褒美ですよ？
掌編集　287

悪役令嬢のお役目は、今日でお終いです。

前世大魔法使いな私には、

塔暮らしはむしろご褒美ですよ？

プロローグ

生地の焼ける香ばしい匂いが鼻先をくすぐる。
『シェリー、パンケーキが焼けたぞ』
相棒に声を掛けられて、シェリーは「すぐに行くわ」と軽やかな足取りでキッチンへと向かった。つい数日前までは殺風景な石造りの牢屋だった場所は、いまでは日当たりの良い憩いの場所へと劇的に変化している。
「綺麗に焼けたわね。ありがとう、ネロ。とても美味しそう」
『まったく、我をこんな風にこき使うのはシェリーくらいだぞ？』
「ふふ、ごめんなさい。貴方がいてくれて、とても助かっているわ」
頬をぷっくりと膨らませてご機嫌ななめな様子でいる相棒は、黒曜石のように艶やかな漆黒のウロコを持つトカゲもどき。ネコと同じくらいの大きさをしており、これが意外と愛らしい。
泣く子も黙ると恐れられているこの地での暮らしも、彼がいるから楽しく過ごせていると言っても過言ではないだろう。
つん、と指先で頬の風船を潰してやると、こてんと転がってしまった。

慌てて両手ですくい上げて、拗ねる相棒の喉元を撫でて宥めてやる。
「一緒に朝食を食べましょうね、ネロ」
『……まぁ、そういうことなら許してやらないこともない』
甘党の彼のために、パンケーキにはたっぷりのクリームとリンゴンベリーのジャムを添える。
「リンゴンベリージャムも付けましょう。甘酸っぱくて、とても美味しいの」
『そういえばリンゴンベリーはサラの好物だったな。焼いた肉に付けてよく食べていた』
懐かしそうに黄金色の瞳を細めるネロ。
かつての主人の姿を思い浮かべているのだろう。
「リンゴンベリーのソース！　ラムチョップやミートボール、ロースト料理にも合いそうね」
甘酸っぱくて、さっぱりとしたソースになるため、肉料理との相性もいい。
「ああ……焼き立てのパンケーキが美味しくて幸せ。毒見後の冷えた料理とは比べ物にならないわ」
『ニンゲンという生き物は大変だな。せっかくの食事を楽しめないとは』
尻尾を振り、遺憾であるとでも言いたげに嘆息するネロこそ、人間のように感情豊かだ。
「でも、いまは存分に食事を楽しめているもの。ふかふかのベッドで好きなだけ眠ることができるし、もう面倒な公務もしなくていい。好きな本を読んで、お菓子も食べ放題！　ここは天国？」
『北の塔とやらは、一般的には地獄だと言われていなかったか？』
ネロには呆れたように一瞥されたが、シェリーにとっては、まさにここは天国に他ならない。

「そういえば、わたくし投獄されているのでしたわね？」
くすりと笑う。物語でいえば、私は真実の愛を邪魔した悪役令嬢、といったところか。
「わたくしを北の塔へと追いやった皆さま方は、今頃どうしていることやら……」
あの最悪の夜のことを思い出しながら、シェリーは深紅色のジャムをぺろりと舐め取った。

第一章　断罪されました

「シェリー・クリステン！　辺境の守護神と嘯く父親の威を借り、王城内にて傲慢な、その態度！　高貴なる王族の伴侶として、そなたは相応しくない！」
豪奢なダンスホールを彩る、煌びやかなシャンデリアの下で名を叫ばれて、シェリーは呆然と己を罵る男を見上げていた。
アルス・フォン・フェデラル。我がフェデラル王国の第二王子で、シェリーの婚約者。
金髪碧眼の美男子だが、努力を嫌う甘ったれた性根の持ち主だ。出来の悪い子ほど可愛いのか、母である王妃に溺愛されて育ったため、このアルスのほうがよほど傲慢な青年である。
クリステン辺境伯令嬢であるシェリーは、とある理由で十二の歳に登城させられた。それから五年、第二王子アルスの婚約者として、この美しくも寒々しい城に囚われて暮らしている。
「聖女となるべき、この愛らしいマーガレット嬢を嫉妬で虐めていたことも知っているぞ」

アルスは端正に整った顔に酷薄そうな笑みを浮かべて、シェリーを見据えた。その腕にしがみついているのは、チェリーブロンドの小柄な令嬢だ。
希少な光属性魔法を使うことができるという、聖女候補――マーガレット・ゲール男爵令嬢。
天真爛漫に笑う、明るくて親しみやすいと評判の彼女が愉悦に満ちた眼差しを自分に向けていることに気付いて、シェリーはそっと唇を噛みしめた。
嫌な予感に身をすくめたが、この場から逃げるわけにはいかない。
震えそうになる足をどうにか動かして、婚約者であるアルスのもとへ歩み寄る。
連日、王宮内の魔道具への魔力補充を強いられ、疲労で眩暈がしていたが、てのひらに爪を立てて耐えた。ここで自分が昏倒したとしても、誰も心配してくれないことは分かっている。
せめてもの矜持で、優雅な所作で一礼してみせた。
「この晴れやかな場において、いったい何事でしょうか、殿下」
「はっ、しらじらしい！　証拠はすべて揃っているのだぞ」
凛とした声音が学園内のダンスホールに響き渡る。
王立学園の卒業パーティーでダンスを楽しんでいた生徒たちが何事かと立ち尽くす中、華やかな音楽を奏でていた楽士たちも戸惑ったように演奏を止めた。
証拠があると言うが、冤罪だ。虐めるどころか、聖女候補であるマーガレットとはまともに会話を交わしたことさえない。
「アルス殿下、それは誤解です。わたくしは……」

「うるさい！　見苦しい言い訳など聞きたくはない！」
誤解を解こうとしても、耳を傾けることさえ拒否されてしまい、シェリーは途方に暮れた。
アルスにしなだれかかっているマーガレットがにんまりと笑う。
（彼女が殿下に嘘を吐いているの？　何のために？　ああ、陛下がいらっしゃれば、こんなことにはならなかったはず……）
同盟国である隣国に招かれて、国王夫妻は不在。
王太子である第一王子殿下も他国へ留学中のため、このフェデラル王国内で現在、もっとも貴い身分なのは、第二王子であるアルス殿下なのだ。
誰も彼の言葉を妨げることはできない。
本来なら主君の非道を窘めるべき存在である側近候補の面々も、彼を咎める様子はなかった。それどころか、アルスと同じ蔑んだ眼差しでシェリーを見据えているのだ。
卒業式を終え、学園のダンスホールでは華やかなパーティーが開かれている。
三年間の学園生活を無事に乗り越えたお祝いとして、多少の騒ぎは黙認されていた。
学生のみで楽しめるようにと、学園側の教師は不在の場でもある。
この一方的な断罪劇を止めに入ってくれる、まともな大人は誰もいなかった。
（唯一の成人男性は、アルス殿下の近衛騎士たちだけ。でも、彼らは王族の命令にしか従わない）
孤立無援の状況に絶望して、シェリーは冷え切った指先をぎゅっと握り込む。
うちひしがれた様子の彼女を目にして、アルスは勝ち誇ったような表情で声を張り上げた。

「尊き王族を騙した罪で、貴様は北の塔送りだ。もちろん、婚約も破棄する」
「殿下、国王陛下の裁可もなく、そのようなことを勝手に……」
「うるさい！」
冷静な口調で窘めようとしたシェリーを睨み付けると、高らかに命じる。
「さっさと連れていけ！」
「はっ！」
近衛騎士が恭しく一礼すると、呆然とするシェリーを取り押さえる。こちらが抵抗の意を示していないというのに、乱暴に後ろ手にされて引き立てられた。
小さく苦悶の声を上げると、歩み寄ってきたアルスの側近候補の男がその耳元に囁きかける。
「おとなしくしていろ。無駄に痛い思いをしたくはないだろう？」
「……ッ！」
この男は第二騎士団長の子息である伯爵令息、レスリー・ハリントンだ。学園内において第二王子の護衛を任されているが、剣の腕前を磨くことよりも女遊びに熱中していると聞く。
アルスの腕にぶら下がっている聖女見習いの令嬢ともよく街に遊びに出向いていたとの報告を耳にしたことがあった。
「生意気な女は、北の塔で頭を冷やすのがお似合いだ」
「そうですよ。女性は常に男性を立てるべきです。賢しげにしていても、今の貴女のように殿方から愛されることはありません」

「やだ、ディーンさまったら！　そんなにはっきりと告げたら、シェリーさまが可哀想ですよぉ」
「失礼しました、マーガレット嬢。誰もが貴女のように優しく愛らしいわけではありませんね」
何の茶番なのだろう、とシェリーは呆れてしまう。
レスリーと楽しそうに会話をしていたもう一人の側近候補、ディーンは侯爵令息。宰相子息の彼もマーガレットに籠絡されていたのか。
（賢しげ？　もしかして学年末の試験でわたくしの成績の方が良かったから？）
なんてバカバカしい。近衛騎士に引きずられながら、シェリーは小さくため息を吐いていた。
抵抗する気力がわいてこない理由は明白。昨夜から今朝まで、アルスに命じられて王宮内の魔道具に魔力を補充させられていたのだ。
いくら魔力量に自信があるシェリーとて、さすがに限界はくる。
（……それに、このチョーカー。アルス殿下からの贈り物とのことで、今宵のパーティーの場で装着を強制させられたけれど、これは魔道具ね）
魔力が回復しないことから察するに、おそらくは魔力封じの魔道具。いつものように魔法を使おうとしても、魔力がうまく体を巡らない。小さな炎を灯すことさえ、今は難しそうだった。
（そして、あの魔術師。わたくしが口を開くのを邪魔している）
アルスの側近候補である、もう一人。黒のローブをはおったソーンは男爵令息で、魔術塔に席を置く将来有望な魔術師だ。彼が何らかの魔術を使い、シェリーの喉を締め上げているのだろう。
魔道具のチョーカーの冷たい感触に、シェリーは眉をひそめた。



（口を開こうとすると、首が絞まる。そこまでして、わたくしを北の塔に送りたいの）
乱暴に引きずられながら、ふと背後を振り返る。
アルスが手を振ると、楽団がふたたび音楽を奏で始めた。華やかな円舞曲。時が止まったかのように凍り付いていた学生たちがステップを踏む。軽やかな笑い声。
何事もなかったかのように、パーティーが再開した。
（ああ、わたくしがいてもいなくても、問題はないのね）
悲鳴を上げていた心が絶望に塗り潰されていくのを、シェリーはどこか他人事のように受け入れていた。

魔道具に魔力を吸い上げられて、頭が朦朧とする。
学園のダンスホールから連れ出されたシェリーは王家の紋章入りの馬車に乗せられ、王城の敷地内にある北の塔へ連れていかれた。
王国内には四つの塔がある。
南の塔は貴族牢。王族や高位貴族のための豪奢な牢だ。牢というよりも、もはや別荘に近い。不自由がないように設備は整っている上、三名ほどの使用人も帯同することが可能。
西の塔は子爵以下の貴族のための牢だ。平民用の牢と比べればはるかに上等だが、南の塔ほどの豪奢さはない。使用人も通いのメイドを一人だけ雇うことができる。
東の塔だけは毛色が違い、こちらは魔術師塔と呼ばれていた。囚人を閉じ込めるための牢獄ではなく、魔術師が魔術を研究するための施設として用いられている。
そんな中でも、北の塔は異質だった。ここは政治犯や凶悪犯を収容する、劣悪な環境の牢獄だ。
使用人の帯同どころか、私物の持ち込みも差し入れも不可。
設備も最低限のもので、人としての尊厳を徹底的に貶めるような場所だと聞いたことがある。
「深窓のご令嬢がここに放り込まれて、さて何日もつかな」
「半日で心が折れるだろう」
「アルス殿下の不興を買ったのが悪い」
馬車から引きずりおろされ、両脇を抱えるようにして歩かされる。
笑いながら語られるのは、そんな内容ばかり。こちらを怯えさせようとしているのだろう。
後ろ手に拘束されているため、歩きにくい。ただでさえ、重く嵩張るドレスを身に纏っているのだ。裾を踏まないようにと履かされている踵の高い靴のせいで、靴擦れも痛い。
そんな状態なのに、北の塔の螺旋階段を歩かされ、シェリーは意識が薄れかかっていた。
ふらりと揺れる身体を近衛騎士たちが慌てて支える。
「ちっ、面倒な」
「仕方がない。抱えて歩け」
近衛騎士の一人が舌打ちをする。ぐったりと体重を預けてくるシェリーを仕方なさそうに肩に担ぐと、螺旋階段を上った。目当ての階に辿り着いたようで、足を止める。
「ああ、この部屋だな。高貴なご令嬢には少しばかり狭くて寒くて埃っぽい場所だが、罪人に相応

しい牢獄だ。今が冬でなくて良かったな。一晩で凍え死ぬところだった」
「さっさと放り込んでおけ」
「はっ！」
薄れゆく意識の中、そんな言葉を耳にした直後、シェリーは側頭部に激しい衝撃を受けた。
地面に突き飛ばされたのだ、と理解したのと同時に、あまりの激痛に小さく叫び声を上げてしまう。
（痛い……！）
出血したのだろう。ぬるりとした感触が額から頬に伝わってくる。
側頭部がいちばん痛いが、ぶつけた背中や腰、そして足首にも捻ったような違和感があった。
息を止め、身体を丸めるようにして、どうにか痛みから逃れようとあがく。
手首の拘束もそのままだったので、出血した箇所を押さえることもできない。まるで頭の中を鋭い刃物で引っ掻きまわされているかのような激痛に、ただ耐えるしかない時間が過ぎていく。
「……っ…はぁ……」
どのくらい、そうしていたのだろうか。束の間、意識を失っていたようだ。
ようやく呼吸ができるほどに落ち着いてきて、シェリーは深く息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出した。ぼんやりと目を開ける。
冷たく硬い石畳の感触に、どうやら地面に倒れていたのだと理解した。頬がこすれて痛い。
薄暗い室内にようやく目が慣れてきた。

「北の塔に打ち捨てられたのね、わたくし……」
石造りの、殺風景な牢獄だった。
王宮で与えられていた部屋とは比べようもないほど狭く、息苦しい。
ぐるりと壁を見渡すと、高い位置に一か所だけ空気取りの穴が開いていた。手が届く位置にないのは、脱走防止のためなのだろう。鉄格子が嵌っている。
牢獄の入口には頑丈そうな木製のドア。小さな小窓が付いている。ここから中を監視するのだろう。食べ物を差し入れるためにも使われるものなのかもしれないと、ぼんやり考える。
壁際には粗末なベッドがまるで棺桶のようにぽつんと置かれていた。
頑丈そうなのだけが取り柄で、とても硬そう。枕もなく、ボロボロの毛布が一枚だけ畳んで置かれてある。きちんと洗っているのかさえ怪しいほどに汚れていた。
「これでは高貴なご令嬢どころか、平民でも無理ではなくて？」
呆れたようにため息を吐くと、シェリーはそろりと身を起こした。
体中がまだ痛かったが、気にしない。
後ろ手に拘束されているので動きにくいが、どうにか壁に身を預けることができた。
「凶悪な囚人ではないのだから、牢獄内では拘束を外すべきでしょうに……」
魔道具のチョーカーを外すことも、怪我の様子を見ることも、手首の拘束を外すという最低限のことさえもしてくれなかった近衛騎士たちをシェリーは苦々しく思う。
「騎士道とやらを滔々と語るくせに、紳士とはほど遠い連中だこと」

嘆息まじりに吐き捨てる。不思議と、頭の中が冴えわたっていた。
（わたくし、これほどに毒舌だったかしら……？）
ふと、違和感を覚えた。今までの自分とは何かが違う、そんな気がする。
不思議に感じて、ぼんやりと思考を辿ると、思い出したことがあった。
「意識をなくした間、夢を見ていたわ。黒髪で黒い瞳の女の子がいた……」
夢の中で彼女と言葉を交わした気がする。何を話したのだったか――
「……そう、彼女はとても怒っていた。わたくしのために、怒ってくれた」
それは、久しぶりの感覚だった。大好きな家族と離されて、五年。シェリーのことを案じて本気の感情をぶつけてくれた人は、この王城にはいなかった。
十二歳の誕生日に、王都で受けた鑑定の儀。そこで類まれな魔力量が判明し、すぐに国に抱え込まれてしまったのだ。第二王子の婚約者として。
家族は婚約に反対したが、初代のクリステン辺境伯と建国の王との約定があると諭され、ついには王命を下されたため断り切れなかった。
（それもすべては、わたくしが王国でも屈指の魔力量を保有していたから……）
建国から数百年の時を経て、魔力を持つ王族は生まれにくくなっていた。
第二王子であるアルスもまた、魔力を持たずに生まれてきたため、その補佐としてシェリーが選ばれたのだ。屈指の魔力量を誇る彼女の血を王族に入れるのが目的である。
文字通りの政略結婚。そこには愛も情もなかった。

思春期の折に将来の伴侶を突然押し付けられたアルスにとっては災難だったかもしれないが、それはシェリーだって同じこと。
（なのに、あの方はわたくしを虐げた。気に入らない、たったそれだけの理由で）
あれから五年間。領地への里帰りも許されず、ずっとこの冷たい王宮に閉じ込められるようにして暮らしてきた。
（家族と会えるのは、年に一度だけ）
社交シーズンのため、王都のタウンハウスに滞在する父と兄が王城に出向いてくれた時のみ。
（窮状を嘆いても、どうにもならない。王命だもの。辺境伯家と王家が仲違いするわけにはいかない。わたくしが我慢すれば、すべて丸く収まる。お父さまやお兄さまを悲しませてしまうから、わたくしはここの暮らしが辛いことを誰にも、家族にさえ話せなかった……）
だから、シェリーの境遇に怒ってくれたのは夢の中の彼女だけ。
それがとても嬉しくて、涙をこぼすと、夢の中の少女はぎゅっと抱き締めてくれて――
「ああ……思い出しました」
シェリーはぽつりとつぶやいた。
そう、思い出した。すべてを、とは言えないが、とても大事なことを。
自分が前世、日本という国で女子高生をしていた、普通の女の子だったことを。そして、ある日突然、異世界へと召喚されたことを。
とても懐かしい――そして、少しだけ胸が痛い記憶。

「そういえば、わたくし前世は大魔法使いでした」
夢の中の少女――サラこそが、かつての自分。日本から異世界へと召喚され、大いなる力を授かった大魔法使い。命を賭して魔王を封印した伝説の英雄として、王国の歴史書に刻まれている偉人だ。
見た目こそ彼女とは異なるが、魂はそのままに生まれ変わったのだと理解すると、不思議と心が軽くなった。
「前世のわたくしは魔法が使えた……」
だが、今のシェリーはまともな魔法を使ったことがない。
鑑定の儀で屈指の魔力量の持ち主だと判明して王城に引き止められたが、魔法の使い方自体は誰にも教わっていないのだ。
魔力の扱い方や魔法の使い方に長けた家族の元からも、すぐに離されてしまった。
そして王城で命じられたのは、魔道具に魔力を補充することだけ。それもただ魔道具に手を置くだけなので、魔力を操作する方法さえ教えてもらえなかった。
シェリーは辺境領の騎士たちが修練していたのを覗き見ていたから、その経験を元にどうにか魔力を操作することだけはできるようになっていた。
「そういうものだと思い込まされていたけれど……つまり、わたくしが魔法を使えるようになることを恐れていたということよね？『シェリー』のことを何だと思っていたのかしら」
魔力を持つ王族の子を得るための便利な道具くらいにしか考えていなかったか。とても腹が立つ。

「復讐がしたいわ。……けれど、その前に」
深呼吸をして、クールダウン。
首に装着させられた魔道具のチョーカーのせいで、今は魔法が使えないが――
「前世の『私』はスキルをたくさん持っていたのね」
触れたものを別の空間へ送り、保管することのできる収納スキル、アイテムボックス。
意識を集中させて念じると、手首を拘束していた縄が消える。成功だ。赤く擦れた肌をひと撫でして、シェリーはほっと肩の力を抜いた。
指先でチョーカーに触れて、こちらもアイテムボックスに収納する。これで魔法が使えるはず。
「魔道具も問題なく収納できました。さすが、大魔法使いのスキル」
発動させたことで、シェリーは嬉しい誤算に気付いた。
「まぁ、驚いた。記憶と能力を引き継いだだけだと思っていたけれど、まさか前世でアイテムボックスに収納した物がそのまま残っていたなんて……！」
脳内に収納物のリストが浮かび上がる。いったい、どれほどの収納容量を誇っていたのか。
その物資は、恐るべき量だった。
「……これ、すべてを取り出したら、お城が埋まってしまうのでは？」
それほどにあらゆる物資や素材、そして魔獣や魔物の死骸が収納されていた。
ざっと目を通したところ、高ランク魔獣のドラゴンも収納リストにあって、目を剥きそうになる。
「リストの中身を確認してみたいところですが、まずは身体を癒さなくては」

床に叩き付けられて傷を負った側頭部はまだ出血が止まっていないのだ。
背中や腰、捻った足首も痛みを訴えている。
「治癒魔法を使うのはまだ難しそうですね。魔力が回復していません」
魔力の回復には時間が必要。休息と栄養も必須なため、本来ならこのまま休むところだが、前世の記憶から、アイテムボックスにポーションがあることを思い出したのだ。
てのひらに取り出したポーションは上級ポーションだった。
辺境伯令嬢にして、第二王子の婚約者だったシェリーはもちろん、各種ポーションを目にしたことは何度もある。まずは、平民でも購入できる価格の下級ポーション。次に金貨一枚相当の中級ポーション――これは稼ぎのある冒険者や懐に余裕がある者しか使えない。
そして今シェリーが手にしているもの――上級ポーションはさらに希少で、金貨十枚で販売されていると聞いたことがある。
（日本円にして百万円、というところかしら？　ぼったくりね）
脳内に浮かぶ感想はおそらくサラのもの。前世の記憶に感情が引きずられている気がする。
ガラスの小瓶をまじまじと眺めていると、ふいに鑑定スキルが発動した。手にしたポーションが『異世界より召喚されし賢者作の上級ポーション』であると読み取れてしまう。なんと、あの召喚賢者が作った上級ポーションだというのだ。
しかも、通常のものと比べて、およそ三倍の効果があるらしい。
「召喚賢者作、三倍の効果がある上級ポーション……。いえ、それにも驚いたけれど、前世のわたくしには鑑定スキルもあったのね……」
さすが、大魔法使い。ものすごい存在だったと知識としては知っていたが、身をもって実感する。なんといっても鑑定スキル持ちは希少で、王都にも二人しかいないと聞いたことがあった。
とにかく、まずは怪我を治さなければと、意識を切り替える。
「収納リストによると、まだ五百本ほど予備があることですし、飲んでしまいましょう」
召喚賢者印の上級ポーションの効果は想像以上だった。
頭の怪我だけでなく、身体の不調があっという間に癒された。
「これは、すばらしいわ。先ほど負った怪我だけでなく、慢性的な疲労も消えた？　睡眠不足で荒れていた肌も元通りになっているわね。それに、魔力も回復している……」
魔力回復ポーションのレシピは失われて久しいと聞くが、この上級ポーションは治癒だけでなく魔力も回復させることができるのか。
「これはぜひとも、我が辺境伯領に持ち帰らなければ」
辺境の地はかつて魔王が統治していた魔の森と隣接している。魔の森は、今では我が国の領地となっているが、魔素が濃いため人が住むことは難しく、魔獣や魔物の住処となっているのが現状。
そのため辺境伯領では、魔獣や魔物の被害が未だに勃発しており、辺境伯軍はその制圧に苦心しているのだ。
「このポーションの存在を国に知られると厄介ね」
シェリーは上級ポーションを秘匿することに決めた。前世の記憶を思い出す前の、王家に洗脳さ

れた状態の彼女なら、決してしなかった判断だ。
そのことに気付いて、シェリーは小さく笑う。
「もう、あんな矮小な男に怯えることはない……。魔力もなく、剣を使って戦う勇気も、突出した頭脳もない、血筋だけが誇りの男なんて怖くないわ」
だって、自分には大魔法使いだった記憶があるのだ。かつてほどの魔力量はないかもしれないが、知らなかったはずの魔法の使い方がこの魂に刻まれている。
「教わったことはないけれど、どんな魔法も、今なら使えそう」
そう、今のシェリーは望めば、何だってできるのだ。
「てっとりばやく魔法を試すには……」
己を閉じ込める北の塔の一室を見渡して、ふふっと笑う。
「まずは、お掃除をしましょうか」
ゆっくりと立ち上がると、室内を歩いて回る。
牢獄なだけあって、床も壁も汚れがひどい。隅にホコリが溜まっているし、床には染みがこびりついている。血や体液の痕らしきものも残っていた。
「これだけ汚れた部屋なら、存分に試せそうだわ」
匂いもひどい。こんなに不潔な環境だと、害獣であるネズミもいそうだ。前世の記憶にある黒い虫も出るかもしれない。想像するだけで、ぞっと肌が粟立った。
シェリーは鳥肌の立った両腕を撫でさすりながら、さっそく掃除に取り掛かることにした。

「邪魔な家具はすべてアイテムボックスへ」
ベッドとトイレ用の粗末な木桶を目視で収納。何もなくなった牢内で、風魔法を操った。
「不思議。息をするように魔法を使うことができる。ゴミを窓の外に放り出すこともできたわ！」
くるくると指を回すと、小さな竜巻が発生して床のゴミを巻き上げてくれる。
「ふふ、わたくしも魔法が使えたわ。なんて楽しいの」
建国から三百年。人の暮らす土地を狙って侵略戦争を仕掛けてきた魔王を、慈悲深き女神により異世界から召喚された大魔法使いと賢者が、この地に元より暮らしていた勇者と聖女と共に封じてから、それだけの年数が経っていた。
平穏な時代に生きるこの国の民には、魔力持ちが少ない。毎年行われている鑑定の儀でも、魔力持ちが見つかることは、めったにないという。
初代王――元勇者と聖女の血を引く王族でさえ、魔法を扱えるほどの魔力持ちは二人だけ。
（それに魔力があっても、魔法は使えない。王宮魔術師も魔道具や魔法陣を介さないと大きな魔法を発動できなくなっていると聞くわ。祭りの際に小さな花火を上げるのが精々だとか）
だが、召喚賢者の血を引くクリステン辺境伯家は、シェリーはもちろんのこと、父も兄も魔力持ちだ。父と兄は騎士でありながらも上級魔法を扱えるほど。
魔素の濃い、魔の森に隣接する土地に住んでいるため、クリステンの家系には魔力持ちが多く生まれるのだと考えられているが……父に言わせれば、魔力の有無はともかく魔法の扱いについては怠惰な魔術師の鍛錬不足らしい。

「勇者の血を引くのに魔力がないことがコンプレックスだったのでしょうね、アルス殿下は。だからといって、わたくしに八つ当たりして良い理由にはならないけれど」
そんなことよりも、魔法だ。
「風魔法でゴミを取り除いたら、次は水魔法ね。汚れを綺麗に落としましょう」
ふと脳裏をよぎったのは、前世の記憶。高圧洗浄機のように、勢いをつけた水で洗い流せば、きっとピカピカになる。さっそく魔力を練り上げて、水魔法を発動。
絶妙な勢いに調整した水流はこびりついていた汚れを面白いほど綺麗に落としてくれた。
「何かしら、これ。とっても楽しい！」
サファイアのような澄んだ蒼の瞳を輝かせて、シェリーはせっせと水魔法で牢内を磨き上げた。
楽しすぎて床だけでなく、壁や天井までピカピカにしてしまった。
「なんだか、すごくスッキリしたわ。これはストレス解消にぴったりの魔法では？」
目に見えて成果が分かる掃除はとても楽しい。とはいえ、ちょっとだけやり過ぎたかもしれない。
シェリーはほっそりとした肩を抱きしめて、身を震わせた。
そういえばパーティー用のドレス姿のままだった。季節は春だが、水遊びにはまだ早い。
「……寒い。風邪をひいてしまいそう」
慌てて、ふたたび風魔法を発動。魔力の質を変えて、温風を牢内に行き渡らせる。
なんとなく脳内に『ドライヤー魔法』という言葉が思い浮かんだ。
「乾いたわね。見違えるほどに綺麗になったわ」

じめじめとした嫌な湿気も消え、カビくさい臭いもしない。床や壁もまるで新品のよう。
シェリーは満足げに微笑んだ。
「お掃除の次は、殺風景なお部屋の模様替えをしましょう」
先ほどアイテムボックスに収納したベッドは使うつもりはない。
（だって、もっと素敵な家具がアイテムボックスにはたくさんあるのだもの）
収納リストを呼び出すと、目の前に透明なモニターが現れる。脳内でも確認はできるが、こちらの方が分かりやすい。項目別にまとめて物資が収納されているようだった。
「牢内がそれなりに広くて助かったわ」
せっかくなので、快適に過ごせる部屋へと改装したい。
まずは、床に敷く絨毯を探した。ラグは十種類以上、敷物にできそうな毛皮は数えきれないほど収納されていた。収納リストと鑑定スキルを併用すると詳細が伝わってきて、とても便利だ。
「まぁ、これは南の大国パルスの絨毯ではなくて？」
王都で購入しようものなら、一点で金貨二百枚はする高級品だ。
さっそくアイテムボックスから取り出してみた。
「なんて素敵な模様なのかしら。敷物にするのがもったいないくらい」
王宮では応接間の壁にタペストリーとして飾っていたことを思い出す。
「でも、アイテムボックスにはまだ十点以上あることだし、遠慮なく使わせてもらいましょう」
床は綺麗に磨き上げたので、思い切って使うことにした。

パルス絨毯は羊毛とシルクの組み合わせで丁寧に織られているため、手触りがとてもいい。
「はしたないけれど、裸足で歩きたくなるわね」
さすがに裸足になるのは躊躇われたので、靴だけ脱ぎ捨てることにした。
絹の靴下姿になると、その開放感に踊り出したくなる。
「次は寝台ね。どうせなら、大きなものがいい。天蓋付きの、こちらにしましょう」
アイテムボックスから取り出したベッドを部屋の真ん中に設置する。
天蓋カーテン付きの豪奢なベッドは大人三人が余裕で横たわれそうな大きさだ。
シワひとつなくピンと敷き込まれた清潔なシーツ。とろりとした肌触りの毛布と丁寧に縫われたベッドカバー。どれも最高品質なことは、一目で分かった。
「さすが、大魔法使いの所持品」
その他にもクローゼットやドレッサー、ソファにテーブル、ライティングデスク、本棚などの大型の家具類を次々と取り出しては牢内に設置していった。
無骨な壁には目隠し用のタペストリーを飾った。丁寧に刺繍が施された芸術品だ。
「これほどの作品、王宮でもなかなか見られないわね」
うっとりと家具や装飾品を眺めて、ため息を吐いた。
王宮に用意された私室の家具はどれもシェリーが選んだ物ではなく、押し付けられた物ばかり。好みを聞かれたことも、使い心地を尋ねられたこともないので、借り物としか思えなかった。
でも、今ここにある家具はすべて彼女が好きだと思ったものばかりで揃えてある。

惚れ惚れと室内を見渡して、シェリーは花が綻ぶような笑みを浮かべた。
「今日から、ここがわたくしのお部屋ね」

第二章　北の塔暮らし

身体が冷えたこともあり、掃除の後は風呂に入ることにした。
「普通は牢獄で優雅にバスタイムを堪能するなんてできないでしょうけれど……」
シェリーはアイテムボックスの収納リストにバスタブを発見していたのだ。
さっそく取り出して、壁際に設置する。
陶器製のバスタブには金属製の猫脚が付いていた。アンティークな雰囲気もあって、好みのデザインだ。ウキウキしながら魔法でお湯を満たしていく。
「魔道具でお湯を沸かすよりも魔法の方が早いわ」
なにより、メイドの手を借りなくても良いので、気楽だ。シェリーは王宮でいつもメイドたちに遠慮して過ごしていた。今思うと、シェリーを冷遇するアルスたちの意向を受けて、彼女たちもシェリーを軽んじていたのだろう。
パーティー用のドレスを脱ぐのには少しだけ苦労した。コルセットでくびれを作り、背中側に飾りボタンがあるデザインのドレスは人の手を借りて着脱するものなので。

「まぁ、魔法が使えるようになったわたくしには手伝いは不要ですが」
アイテムボックスに収納されていた全身鏡を壁に立て掛けて、無属性の魔法で背面の飾りボタンを開け、するするとドレスを脱ぎ捨てた。
「あまり重い物は持ち上げられないけれど、この『念動力魔法』は便利ね」
魔道具でもある杖を媒介にすれば、細かい作業もお手のもの。
使用人のいない牢内ではとても役に立つ魔法だと思う。
「バスタブにはリラックス効果のあるラベンダーの精油を数滴。……良い香りだわ」
ゆったりと湯に浸かり、まずは冷えた体を温めた。ラベンダーの香りが気持ちを落ち着けてくれる。このバス用のオイルもアイテムボックスに収納されていた、サラの愛用品だ。
家具や衣服、食料品以外にも令嬢の嗜みとしてか、基礎化粧品がしっかり収納されていた。
「お化粧を落とすのは、この植物オイルがいいわね」
上質な植物オイルで化粧を落とし、丁寧に腰までの長さの髪を洗う。
王宮では灰汁を使って作った石鹸で髪を洗い、オイルで艶を出していたが、サラは召喚賢者印の特製シャンプーを使っていたようだ。
「すごい……。汚れが綺麗に落ちたし、髪の毛がさらさらになったわ。オイルを使っていないのに艶々ね」
さすが、召喚賢者印のシャンプー。鑑定スキルと錬金術を駆使して、日本のものと遜色ないものを作り出していたようだ。しかも、柑橘系の香り付き。

「これに慣れてしまったら、もう今までの石鹸は使えなくなりそう」
青みを帯びた銀髪を眺めていると、同じ色彩をまとう父と兄のことを思い出した。
「今回のアルス殿下の所業を耳にしたら、お父さまは激昂するでしょうね」
シェリーの父――クリステン辺境伯は辺境の守護神と称えられる人物で、王国最強の騎士として知れ渡っている。
広大な辺境の地を有し、隣接する魔の森から溢れ出る魔獣を抑えている父は国の英雄だ。彼がその職務に熱心なおかげで、王国は魔獣に蹂躙されずに済んでいる。
国王陛下はクリステン辺境伯家を大いに頼りにしていたはずだが――
「そのわりに、わたくしの扱いはぞんざいでしたわね？　もしかして、我がクリステン家は王家にバカにされていたのかしら」
第二王子の婚約者にと王宮に招かれたが、遇された記憶はあまりない。
最低限の教育や淑女としてのマナーは仕込まれたし、王子妃候補としての予算は組まれていたので、身を飾るドレスや宝石は不自由がない程度には与えられていた。
そのことには感謝しているが、代わりにとばかりに王妃やアルス殿下から「魔力を補充せよ」と大量の魔道具を押し付けられていたのだ。
魔道具の動力源は、魔獣や魔物から手に入る魔石である。その魔石の中に込められた魔力を用いて、ランタンに光を灯し、バスタブにお湯を満たすことができるのだ。
たとえば王宮のダンスホールを飾る豪奢なシャンデリアも魔道具である。

前世の『電池』と同じように、魔石は消耗品だ。通常は使い捨てになるのだが、豊富な魔力量を誇るシェリーは空になった魔石に魔力を補充することができた。

「毎日、魔力が空になるまで魔石に補充していたおかげで、さらに魔力量が増えたのは良かったのだけれど……。いま考えると、あれは普通に虐待では？」

魔力を使い切り、気絶するように眠りにつく日々が五年も続いたのだ。嫌がらせ以外の何ものでもない。それが当たり前だと思い込まされていたが、前世の記憶を思い出したおかげで、客観的に現状を判断できるようになった。

（おそらく、わたくしは人質のようなものだったのでしょうね）

父を恐れた王族が、シェリーを王宮に縛り付けていたのだ。

「でも、もう洗脳は解けたわ。前世の記憶を思い出したからには、王家の好きにはさせない」

異世界から召喚された大魔法使い、栗栖紗良。そして、彼女と共に日本から召喚された賢者――栗栖悠馬こそが、我がクリステン辺境伯家の祖先である。

召喚されたユウマは魔術と錬金術を得意としていた。王国の発展のため、数々の魔道具を発明した偉人で、彼が作ったものは『召喚賢者印』として普及している。

二人は仲の良い姉弟だったと聞く。

「弟のユウマさまの血を引いていたから、この身に生まれ変わったのかしら……」

いずれにしても冤罪で北の塔に幽閉された直後に記憶を思い出せてよかったと、しみじみ思う。

まだ、前世の記憶は少ししか思い出せていないが、最強の大魔法使いだった『サラ』は破天荒な性格をしていたので、断罪された瞬間に思い出していれば、怒りのあまり王宮ごと魔法で破壊していたかもしれない。

「それはそれで面白そうだけど……。どうせなら、もっとじっくり復讐をしたいわね」

風呂を終えると、バスタブごとアイテムボックスに収納した。

「体を拭く布は……これね、バスタオル」

アイテムボックスから取り出したのは、こちらも召喚賢者が開発したバスタオル。手触りの良さと吸収性に感心しつつ、ふかふかのタオルで手早く肌を拭った。

腰まで届く長髪はドライヤー魔法で瞬時に乾かして終了。

「着替えはこれにしましょう」

アイテムボックスから取り出した部屋着に着替えると。

ホーンラビットの毛皮で作られたスリッパを履いて一息ついたところで、空腹を自覚した。

「そういえば、食事を忘れていたかも？」

誰かが夕食を運んでくる様子もないことだし、自分で用意することにした。

「温かなスープって、こんなに美味しかったのね……」

ほうっと息を吐きながら、ポトフを口にする。

アイテムボックスには、サラが料理人に作らせた大量の調理済みの料理が収納されていた。

野営道具の他に、食材と調理器具もしっかり収納されていたが、シェリーは辺境伯令嬢であり、

王宮では王子の婚約者だった。つまり、調理の知識はあるが、経験は皆無。
そのため仕方なく、調理済みの料理を食べることにした。
大きな鍋いっぱいに入っていたポトフを魔法で温めて、同じく収納されていたパンを主食にする。
アイテムボックス内に収納した物資は劣化しないことは知っていたが、口にするのは勇気がいった。
覚悟を持って食べてみたのだが、その美味しさに驚いてしまう。
「フォレストボア肉入りのポトフも素晴らしい味だけど、この白パンの美味しいこと……！」
王宮で食べているパンよりもよほどやわらかく、ほのかな甘みが絶品だった。
前世の記憶が『米粉（こめこ）で作った、もちふわバターロール』だと訴えてくる。覚えておこう。
「王宮での料理はどれも毒味済みの冷えたものばかりだったから、温かいスープというだけでご馳走に思えてくるわ」
王族と同じテーブルでの夕食は特に憂鬱だった。美しく盛られた皿も、毒見役がスプーンでぐちゃぐちゃにしていたので、食欲も失せるというもの。高価な食材を使っていたのだろうが、故郷で家族と共に食べた塩で焼いただけの串焼き肉のほうがよほど心に残る食事だった。
「家族と領地にいた時は、温かい料理を食べていたわね。懐かしいわ……」
アイテムボックスの中には、まだまだたくさんの料理が収納されている。そして、今のシェリーには自由な時間があるのだ。
「しかも、サラの記憶を元にしたレシピで作られた料理ばかり！　最高ね」
温かくて、美味しい食事。誰にも邪魔されずにのんびり楽しめるバスタイム。

そして、清潔でふかふかのベッド！
「わたくしがこの北の塔で過ごしていれば、噂を聞きつけたお父さまとお兄さまがきっと助けに来てくださる」
愛娘（シェリー）を蔑ろにされていたと知った父は烈火のごとく怒って、王都まで駆け付けてくれるはず。
召喚賢者の血を引く我が一族を怒らせた王家に、もはや明るい未来はない。
今までのシェリーだったら、自分にも悪いところがあったと、王家に不利益が生じないように立ち振る舞っていただろうが、もうそんなことをする気はない。
王家に対しては失望の気持ちが大きかった。十二歳で家族から引き離されて、それでも王国のためには必要なことだと血の滲むような努力を続けてきたのに、北の塔に送られたのだ。
それほどシェリーのことが気に食わないと言うなら、婚約解消を国王陛下に願い出るべきだった。正式な手続きも取らず、有責になるのを恐れて冤罪を吹っ掛けてくるなど、言語道断だ。
婚約者だったアルスは元より、彼を諫めることができない周囲にも、そして教育に失敗した国王夫妻にも大いに失望していた。
「ガッカリだわ。せめてもの気晴らしに、北の塔で快適に過ごすことにしましょう」
シェリーがこの場所に居座るだけで、王家に対する復讐（いやがらせ）となるのだ。
「家族に心配を掛けるのは申し訳ないけれど、ここで迎えを待ちます」
かつてないほどの解放感に満たされて、シェリーは心の底から安堵していた。
今日はもう疲れたので、休むことにしよう。

ふかふかのベッドに横になると、すぐに睡魔がやってきた。
繊細に整った貌にやわらかな笑みを浮かべると、シェリーは深い眠りに身を任せた。

◆◆◆

それは大陸一の高さを誇る山脈の、深い渓谷に身を横たえていた。
黒曜石のように煌めく美しいウロコに覆われた巨体が、小さく身じろぎする。
懐かしい気配がした。だが、それは失われて久しいものだったので、彼が求めてやまない存在であるはずがないとすぐに思い直す。
（彼女がいないと、この世界はとても退屈だ）
ふたたび深い眠りにつこうとした彼だったが、ふと頭を上げた。
（いや、違う。これは、この魔力は彼女のものだ。我が間違えるはずがない……！）
約束通りに彼女は戻ってきてくれたのだ――
そう理解するや否や、彼は身を起こして興奮のあまり、ぶるりとその巨体を揺らした。百年単位で眠りにつく彼の体表にこびりつく堆積物が地面に振るい落とされる。
今すぐにでも彼女のもとへ駆け付けたかったが、正式に招かれてはいない身だ。
この姿のままで駆け付けると、彼女の不興を買ってしまうかもしれない。
（それは嫌だし、怖い。彼女は怒らせたら、とても面倒なのだ……）

少しだけ思案して、彼は己の分体を生み出すことにした。
本体の百分の一にも満たない、小さくて弱々しい存在だが、彼女の助けにはなるはずだ。
（彼女に呼ばれるまでは、大人しく眠っていよう）
それまでの孤独を忘れるための眠りとは違う、幸福な夢を見られる予感に彼は口元を緩めた。

◆◆◆

辺境伯令嬢シェリー・クリステンは生意気な女だった。
アルスが彼女と初めて出会ったのは、十三歳の時のこと。我が国の英雄であるクリステン辺境伯が父王に会いに来たと耳にして、無理を言って同席させてもらったのだ。
その場に、彼の娘であるシェリーもいた。青みを帯びた銀髪とサファイア色の瞳をした可憐な少女。まるで妖精のような姿にアルスはすっかり目を奪われてしまっていた。
アルスだって王宮住まいの王族なのだ。見目麗しい者は飽きるほど目にしてきたが、清楚で可憐な容貌のシェリーには月夜でしか咲かない花のような儚げな魅力があった。
すっかり彼女に夢中になったアルスはすぐに両親にねだった。玩具をねだるのと同じくらいの熱量で、あの子が欲しいと訴えたのだ。
母は顔をしかめたが、父は何やら思案して、あと数日待てと言ってくれた。
数日後、シェリーは鑑定の儀で魔力を持つことが判明した。しかも、滅多にないほどの魔力量を

有しているとのことで、特別な魔道具で鑑定した神官がとても興奮していた。
（魔力があるのか、シェリーは）
ちくん。最初の棘だ。……アルスは昨年の鑑定の儀で『魔力なし』を宣告されていた。
（父上も兄上も魔力があったのに、俺だけ魔力がなかった。でも、それは仕方がないことだって、母上が……）
一度は納得したことだった。魔力持ちは百人に一人の割合で現れるのだと聞いたことがある。
だから、自分に魔力がないのは仕方がないことだと納得していたのに。
（シェリーは神官が顔色を変えるほどの魔力持ち……）
王族でもないくせに。ちりり、と胸の奥が疼く。
父王は鑑定結果を耳にするや否や、満足そうに笑った。
そうして、かつて互いの祖先が交わした『賢者の素質のある子が生まれたら、勇者の血統の王族と婚姻させる』という古い約定を持ち出し、シェリーを王宮に召し上げたのだ。
『我が第二王子アルスの婚約者としよう。よいな、クリステン辺境伯』
まだ幼いので、と遠回しに断ろうとした辺境伯だが、古の約定を持ち出されては断れない。
その日から、シェリーはアルスの婚約者として王宮に私室を与えられた。

最初は、アルスも浮かれていた。一目惚れした愛らしい少女が自分のものになったのだ。
だが、すぐに浮かれた気持ちは粉砕された。シェリーが彼の想像以上に優秀だったのだ。

頭の回転が速く、記憶力もいい。アルスが途中で投げ出した王国の歴史書も読みこなし、誦じた。
辺境暮らしのため馬術も得意で、己の手足のように馬を操る手際には、厳しい騎士団長まで感心していた。運動神経も良かったので、唯一アルスが得意とするダンスも軽々とこなす。
淑女のマナーだけは身につけるまでには苦労していたが、半年も経つと、講師である侯爵夫人が手放しで褒めるほどに、その所作は美しく洗練されたものへと変わっていた。
見目麗しく、優秀な婚約者のシェリー。彼女の頑張りと能力を褒め称えるべきだったのに、アルスはそうしなかった。シェリーが優秀すぎて、劣等感に苛まれていたのだ。
自分よりも賢く、何でもできて、教師に褒められる彼女が憎くて仕方ない。
しかもシェリーは自分にはない魔力を持っているのだ。彼女を見ていると、己の無力さを突きつけられている気がして苛々した。
だから、アルスは彼女を利用するようになった。王族はみな十五歳になった頃から公務を任されるようになるのだが、アルスはその書類仕事を婚約者であるシェリーに押し付けたのだ。
『これもお前を思ってのこと。王子妃になるのだから、俺をフォローするのは当然の仕事だ』
『……かしこまりました、アルス殿下』
側近候補の取り巻き連中は皆、見て見ぬふりをした。
王妃である母もアルスを窘めることはなく、それどころか自身の公務も彼女に回して笑っていた。
『愛しい夫を助けるのが、妻の喜びなのですよ。そして義母を助けるのが、嫁の務め』
そういうものか、と納得した。

仕事を手放して暇になった時間は、遊びに充てた。
取り巻きの一人が女遊びを教えてくれたのも同じ頃だった。婚約者であるシェリーとは正反対の、明るくて可愛いだけの、頭の軽い女にチヤホヤされて良い気になっていた。
（女は多少バカなほうがいい。俺のことをすごいと褒めてくれるからな）
そうやって過ごしてきた中で、アルスはマーガレットと出会った。
明るいチェリーブロンドのふわふわの髪が、学園の廊下ですれ違ったアルスの制服のボタンに絡まったのだ。
『やだ、ごめんなさぁい！』
ぺろっと舌を出して、恥ずかしそうに笑う姿に驚いた。淑女（レディ）が舌を出すなんて！
王宮のマナー講師が目にしたら、怒りのあまり卒倒したに違いない。
だが、アルスは不思議と嫌な気持ちはしなかった。くるくると目まぐるしく変わる表情が愛らしい彼女は最近、学園へ通い始めたばかりの聖女候補なのだという。
『マーガレットと呼んでください、アルスさま。こんなに素敵な王子さまとお会いできるなんて、感激ですっ！』
『そうか。マーガレットも聖女候補として励むように』
名を呼び合うなど、本来ならあってはならないことだ。
だが、この気安い聖女候補の少女は人の懐に入り込むことが特別に上手だった。
聖女とは、かつて魔王を封じる際に勇者や大魔法使い、賢者と共に戦った光属性の魔法使いのことを指す。魔法使いは希少だが、光属性を使える魔法使いはさらに少ない。
王国内にも現聖女を含めて、二人だけ。
そのうちの一人は高齢なため、次期聖女としてマーガレットは有力視されていた。
『フェデラル王国の初代の王さまは勇者で、王妃さまは私と同じ、聖女だったんでしょう？』
親しくなったマーガレットは目をきらきらと輝かせながら、アルスに寄り添ってきた。
『ああ、そうだ。俺の祖先は偉大な勇者だったんだ』
勇者も聖女も強大な魔力を持っていたという。加えて、魔法の扱いにも長けていた。特に王妃となった聖女の血を引く王族は、光属性魔法が使える可能性が高かったはずなのだ。
（なのに、王族である父も兄も使えるのは身体強化系の補助魔法のみ。俺に至っては魔力なし）
はぁ、とため息をついたアルスの腕にマーガレットが己の腕を絡ませてきた。
『ね、じゃあ私が聖女になったら、アルスさまと結婚できるのかしら？』
『おい、不敬だぞ、マーガレット』
腕を振り払おうとしたところで、やわらかな胸を押し付けられた。甘い香りが鼻先をくすぐる。
エメラルド色の大きな瞳を潤ませてマーガレットは上目遣いでアルスを見つめてきた。
こくりとアルスの喉が鳴る。だめだと理性は告げてくるのに、目が離せない。
『そう……だな。いや、俺にはシェリーがいるから無理だ』
『シェリーさまがいなくなれば？』
『いなくなるなら、問題はない。……そうだな。俺をいつも下に見ている、あんな女よりも聖女の

ほうが王族の妻として相応しいかもしれないな』
うふふ、とマーガレットが笑う。気が付いたら、アルスは彼女と唇を重ねていた。
一度触れると、もう理性は制御できなかった。
アルスは婚約者であるシェリーを放置して、マーガレットと遊び歩くようになった。
面倒な公務はすべて押し付けて、魔力自慢の女に相応しい雑用を与えよう。
魔石の購入費用を抑えた分を己の懐へまわせば、遊興費も使い放題だ。
そうして、すっかりマーガレットとの情事に溺れたアルスは、取り巻き連中も巻き込んで、学園の卒業パーティーの場でシェリーを断罪したのだった――

◆◆◆

冤罪で北の塔に投獄されて、はや三日。
シェリーはこの牢獄での暮らしを大いに満喫していた。
「時間を気にせずに好きなだけベッドで過ごせる日々の、なんて素晴らしいこと！」
ふかふかの枕に顔を埋めて、シェリーはうっとりとつぶやく。
夜は魔道ランタンの灯りでアイテムボックスに収納されていた本を読み、眠くなったら、好きなだけ眠ることができるのだ。
お腹が空いたら、その日の気分で食べたいものを好きなだけ食べる。

礼儀作法なんて気にしない。うるさいマナー教師や告げ口をする嫌な侍女もここにはいないのだ。
ベッドの上に寝転んでお菓子を摘んでも、誰からも叱られない。なんて素敵な日々。
パーティー用の豪奢なドレスを脱ぎ捨てた夜から、シェリーはコルセットが必要なドレスは身に纏っていない。
「だって、とても窮屈ですもの。きつくて重くて、肩が凝るドレスなんて、もうたくさんだわ」
アイテムボックスにはサラが作らせた素敵なワンピースがたくさん収納されている。
デイドレスとも違う、シンプルなワンピースだが、洗練されたデザインと素材の良さで、王室御用達のドレスよりもよほど着心地が良い。
（記憶の中のサラが「コルセットなんて内臓に負担が掛かる最悪の服よ」と言っていた理由がよく分かるわ。ああ、とても楽……）
ゆったりとしたワンピースを着て、素足にはスリッパのみ。
絹の靴下？　ヒールの高いパンプス？　そんなもの、北の塔には必要ない。
貴族の令嬢としては褒められた服装ではないが、一度でもこの快適さを知ったら、もう後には戻れそうにはなかった。
「……とはいえ、あまり動かないのは身体によくないわね」
運動不足は身体に悪い。これもサラの記憶にある知識だ。令嬢教育とは真逆の考えかもしれないが、元々お転婆だったシェリーにはむしろ喜ばしい雑学。
ベッドから起き上がると、シェリーは部屋の外に出ることにした。そう、部屋の外。

牢の入口のドアは投獄された翌日には、とっくに撤去していた。
「せっかく北の塔を独り占めしているのですもの。他の部屋も改装して使うことにしましょう」
邪魔なドアはアイテムボックスにそのまま収納してある。手で触れるだけで鍵ごとドアを消してしまえるので、牢破りも一瞬だ。
運動ついでに自室以外のドアも次々と撤去したシェリーだが、ふと小首を傾げた。
「もしかして、わたくし稀代の大盗賊になれるのではないかしら？」
どんなに頑丈な鍵とドアで守られていたとしても、指先で触れてアイテムボックスに収納するだけで、突破することができるのだ。
「復讐の一環で、王家の宝物庫を暴くのも楽しそう……」
思わず、ぼそりとつぶやいたところ、足元から反応があった。
『落ち着け、シェリー。それは泥棒というやつでは？　罪を犯せば捕縛されてしまうぞ』
視線を下に向けて、シェリーは優しく微笑んだ。
「ネロ。そんなところにいたのですか？　危ないわ」
声の主はネコほどの大きさのトカゲもどきである。
シェリーはそっと身を屈めると、ネロという名の居候を抱き上げた。丸々とした愛らしい体型をしているが、意外と体重は軽い。艶やかな漆黒のウロコをそっと撫でると、ひんやりとしている。
『我は丈夫だからな。シェリーに踏まれたくらいでは何ともないぞ』
「ダメよ。怪我をしなくても、わざわざ痛い思いをする必要はありません」

人の言葉を理解している、この黒いトカゲもどきはシェリーが北の塔で暮らし始めて二日目に、唐突に枕元に現れた存在である。
最初はトカゲ型の魔獣か火の精かと驚いたが、瘴気に侵された様子もなかったので、魔法で攻撃するのはどうにか踏みとどまった。
両手で抱えられそうな大きさのトカゲもどきは、ぬいぐるみのような愛らしいフォルムをしている。黄金色のつぶらな瞳でじっとシェリーを見上げてきた。
これは攻撃できない。かわいい。彼の方もこちらを攻撃してくる様子はないので、シェリーは警戒を解いた。理解したのか、彼は短くて太い脚でのそりと歩み寄ってきた。
そうして唐突に『我は大魔法使いサラの使い魔だ』と語り始めたのである。
とても驚いたが、一人きりでの塔暮らしが思いのほか寂しかったようで、シェリーはこの来客を殊の外喜んだ。
前世の彼女が契約を結んだ使い魔のうちの一匹らしく、主人の魔力を感じて寄ってきたのだとか。名前がないという彼にネロと名付けたのはシェリーだ。サラは彼のことを「黒いの」と呼んでいたらしい。『黒いからクロと名付けようとしたのを断固拒否したのだ』と教えてくれた。
（ネロも黒を意味する言葉だけれど、こちらは気に入ってくれたようで良かったわ）
彼の元の主人であるサラがすでに亡くなっていることはきちんと理解しているようだ。なぜか、転生後のシェリーのことも慕ってくれているので、北の塔で一緒に暮らしている。
（ネロのことはまだ思い出せていないけれど、こんなに可愛らしい相棒ができたのは嬉しいわ）

使い魔といえば、護衛役のオオカミや斥候役の猛禽類、鳩などのメッセンジャーバードを思い浮かべるが、彼は少し大きなトカゲ。多少の魔法を使うことはできるが、強そうには見えない。

（きっと癒し枠なのね、ネロは）

それも納得の愛らしさなのだ。犬や猫のような、もふもふの毛皮はないが、賢くて紳士なネロは相棒として申し分がない。何より、彼とは会話が交わせるのだ。

言葉ではなく、念話という形だが、従魔契約を交わした相手とだけ話すことができるらしい。

（わたくしが契約したわけではないけれど、魂が結びついているのかしら？）

彼のおかげで北の塔暮らしがより楽しくなったので、些末なことは気にしないことにした。

腕に抱き上げたネロにそっと頬ずりする。嬉しいのか、彼の喉がくるると鳴った。

「冗談です。悪いことにスキルを使ったりはしませんよ？」

『うむ。大いなる力は、復讐の時のために蓄えておくのがいいぞ』

腕の中で偉そうに頷くトカゲもどきの姿がおかしくて、シェリーは軽やかに笑う。

「復讐は止めないのですね、ネロは」

『正当な復讐は当然の権利であるからな。話を聞いたところ、シェリーの怒りももっともだ』

「ありがとう。そう言ってもらえると、心が軽くなる気がします」

ネロには現状の説明を簡単にしてある。前世の記憶は取り戻したばかりなのだと。魔法を存分に使ったのも、投獄されてからが初めてだと言えば、なるほどと納得していた。

（ここに投獄されなければ、ネロと出会うこともなかったのね）

不思議な巡り合わせに感謝する。

『ところで、今日は何をして遊ぶのだ？』

ネロに尋ねられて、シェリーはくすりと笑う。

「今日は北の塔の改造をするつもり。せっかくわたくしたちのお城になったのですもの。居心地が良くなるように、素敵に改装しましょうね」

『巣作りか！　うむ、快適に過ごせる巣を作るのは良きことだ。我も手伝おう』

「ありがとうございます、ネロ」

たっぷりと睡眠と栄養を取って静養していたおかげで、いくらでも魔法を使えそうだ。

「では、まずは各部屋のお掃除です」

そう宣言すると、さっそく風魔法と水魔法、ドライヤー魔法で塔の中をぴかぴかに磨き上げていく。順調に大魔法使いの記憶が蘇ってきているシェリーは複数の魔法を難なく使いこなした。

手早く片付けようと魔法を使っていると、肩に乗っていたネロが目を剥いて驚く。

『無詠唱で同時に三重魔法を発動だと!?　相変わらず、無茶苦茶な魔法の使い方をする』

「？　そうかしら？　一度に片付けた方が楽だと思ったのですが……」

きょとんと小首を傾げるシェリーをネロはため息まじりに見やる。

『通常は長々とした詠唱が必要なのだぞ、魔法の発動には』

「でも、お父さまもお兄さまも詠唱をせずに攻撃魔法を放っていますよ？」

さすがに無詠唱なのは父と兄だけだが、辺境領軍の精鋭である魔法騎士たちは短縮した詠唱で魔

法を使うことができるのだ。
そう説明すると、ネロはやれやれと首を振る。
『お前たちの血筋がおかしいのだ。簡易な生活魔法ていどならともかく、ここまでの威力の魔法を発動するには魔力を練り上げて集中する必要がある。それを無詠唱で、しかもこの威力』
「それはわたくしが召喚賢者の血統なのと、大魔法使いの生まれ変わりだからなのでしょうね」
『そうであろうな。なにせ、サラはとことん非常識であったから……』
疲れたように遠い目をするネロに、なんとなく申し訳ない気持ちを覚えた。
「サラさまは規格外の大魔法使いだったと聞きますし、すごい方だったのでしょうね。わたくしも見習わなくてはいけません」
『あれを見習う必要はないぞ、シェリー！』
慌ててフォローしてくれるネロはとても優しくて、良い子だ。
「ふふ、ありがとう、ネロ。わたくし、頑張ります！」
『ああ……失言であった……』
なぜか落ち込むトカゲさんは置いておいて、シェリーは張り切って各部屋の模様替えに取り組んだ。ドアをすべて取り外して風通しが良くなった牢内をそれぞれキッチンやバスルーム、ダイニングにリビングと見立てて、整えていく。
「キッチンには魔道コンロと作業台を設置しましょう。ああ、アイテムボックスにちょうど良い物があったわ。立派な食器棚ね。食器やカトラリー類も中に揃っています」

立ち読みサンプルはここまで

使いやすい木製の器がほとんどだが、鍵付きの引き出しには銀食器が仕舞われていた。
その他にも陶器製のシンクに魔道具の水甕（みずがめ）やフライパンや鍋などの調理器具、包丁やまな板も取り出して、使いやすいように設置していく。
『相変わらず、凄まじい量の物品を収納しているな、サラは』
「ええ、驚きました。きっと先々を見据えて、準備を怠らなかった方なのね」
『いや？　本人曰く、貧乏性だから何でも持ち運んでいなければ不安になると言っていたぞ？』
「え……そんな理由で、この量の物資を？」
『着の身着のままで異世界に召喚されたから、また何かあった時に困らないようにしていたらしい』
「ああ、それなら納得です。実際、とても助かっていますもの」
アイテムボックスを引き継げたおかげで、衣食住に困らないで済んでいるのだ。
「これだけの物資がなければ、北の塔に立てこもることはできなかったでしょうね。とても感謝しています」
しみじみと感謝の言葉を述べると、ネロがきょとんとする。
『なぜだ？　いや、そもそもこの場所に居座る理由が分からない。自由の身になりたいのなら、すぐに故郷へ飛び立てば良いのではないか？』
それだけの力は、すでにあるのだ。
だが、シェリーはきっぱりと首を振った。